

思い出に残る 史跡と古道



作家
永井路子氏

聞き手／記念物課文化財調査官 伊藤正義

「本日はお忙しい中、ありがとうございます。先生は作品を書かれる際、実際にその土地に行かれて、ご自分の足で歩かれてイメージづくりをなさるようですが、これまで特に印象に残った道は、こういったところがありませんか？」

「今日は私の中の『大きな道』と『小さな道』についてお話ししたいと思います。」

歴史をたどるにはいろいろな方法があります。史料を読むこと、研究書を読むこと、でも場所を訪ねたり、道をたどったりすると、

一番歴史が肌で感じられますね。道の姿は変わっていても、かつてその道を歴史上の人物が歩いたということを実感できる、これは歴史を書く人間にとっては一番大事なところなのだと思います。

私は前に『茜さす』という長編小説を書きました。これは「壬申の乱」は何であったかというところを、現代の視点から書いてみたものです。

執筆に先だって、大海人皇子と鸕野讃良皇女（のちの天武天皇と持統天皇）の二人が、近江を出て飛鳥に一泊して吉野へたどった道と、その後壬申の乱のときに吉野から津振川のほとりに出て、伊賀から伊勢へ行く道を、私も何回か車で走ったり自分で確かめて歩いたりしました。

このとき、当時、奈良県立橿原考古学研究所におられた玉城妙子さんに案内していただきました。玉城さんをはじめ研究所の方々は実際に『日本書紀』にあるように、旧暦一〇月一九日に近江の宮を出て、飛鳥から吉野、そして伊勢の桑名までの道を全くの徒歩で何回も歩いておられるんです。

玉城さんとの旅は大変楽しい経験でした。たとえば、近江から山城に抜ける道ではどこを通るかを考えたり、沿道にはいろいろな豪族がいて、彼らにも挨拶していったらうという想像ができました。

その間、飛鳥まで行き、翌日、吉野へ出たんです。芋峠を通りまして、吉野の宮滝に入りますが、芋峠に立ちますとね、ぱーっと吉野の歴史の道がアピールな感じというところは、大変意義があると思うんです。ただし、これは歴史の道のはじまりではない。文化庁のできるのは、そのはじまりだけです。

国が上から押しつけるのではなくて、県や市町村に依頼して意見を吸い上げる。これは大変いいことですが、県や市町村の方々が果たしてどこまで歴史の道をお歩きになっているか。本当に道を知っているのは行政の文化財担当者ではないはず。もっと民間レベルの人が歩いているんです。

私の住んでおります鎌倉には、「鎌倉を愛する会」とか、「鎌倉の自然を守る会」とかがありまして、そのリーダーになっている方は、歴史が大変好きで、しかもまったくのボランティアで、毎月歩いておられるんです。私の東京の知人なども、「鎌倉道を歩く会」というささやかなグループをつくり、下調べをして鎌倉道のあちこちを何年もかけて歩いていきます。

たとえば名越の切通を歩きますと、「昔の人はこういうところを歩いたんだなあ」ということ以上に、考えなければならぬ問題が浮かび上がります。それは北条氏と三浦氏との対立です。三浦氏は後でつぶれてしまいつから、北条にはかなわなかった弱小武士団というふうな思われていますが、北条と三浦は勢力が伯仲していて、どちらが主権を握ってもいいくらいでした。名越の先は三浦領なんです。ですから北条氏は名越のところが監視している。そこは道が細く、岩が突き出ている

野の連峰が見えるんです。つまり飛鳥とまったく風貌の違う、大きな峰々がそりたつている。吉野とは何かということを考える意味で、芋峠を越す道というのは、歴史的な重みを感じさせますね。

そして、いよいよ壬申の乱が起きるときに、宮滝からどこを通っていったかというふうなことを考えながら、歩いたわけですが、伊賀を通ったとしても、伊賀は伊賀宋女、つまり大友皇子の母方ですから、今まで考えられていたのは別の道を通ったのじゃないかと、玉城さんがおっしゃりまして、これは小説の中に取り入れられました。

つまり大きな歴史の動きとともに、道もいろいろな役を果たしているということを実感して、一番印象に残っているのが飛鳥の道なんです。これは大きな道です。

「小さな道はどうでしょうか」

この間私は取材をかねて山口に参りました。山口市は大内氏の館があったところですが、そこには毛利元就の時代、長男の隆元が何年間か滞在しておりました。大内義隆は自分の名前の一文字をとって、隆元という名前をつけてやる、また元服の冠も義隆がやってやる。だから、隆元を寄越すようにと言っていますが、半分は体のいい人質です。この冠をかぶせる役を烏帽子親といい、言ってみれば疑似親子関係になるわけです。



国史跡 名越切通
(神奈川県鎌倉市・逗子市)

て馬なら一頭しか通れない。ここにいれば三浦氏の動静が北条側にわかる。そういう道が今も残っているんです。そうすると、これはただ道を歩くのではなくて、歴史を知る道を歩くことになる。それこそ歴史の道ですね。

こういう本当に道を歩いていらつしやる方々の大きな積み上げが、今のところ、果たして文化庁の事業に反映できているのか、きわめて疑問です。

お役人は実際に道を歩いている人を知らないし、実際を知っている人は文化庁の歴史の道指定など知らされていませんよ。それに、私の歩いた「大きな道」は県単位のレベルでは切れ切れになって揃いきれないし、「小さな道」はこぼれてしまっしょう。これをどうするか。文化庁は歴史の道を「指定してやる」のではなく、もっと謙虚に、これを機会に民間の方々はどうしたらもっと接触ができるか、具体的に考えるべきです。

「どうもありがとうございました」

たぶんそうであろうということで、現地を案内していただきました。そこはまったく遺跡が残っておりませんけれど、一方、大内の館跡は政府であった大内屋敷と、住居区間である築山屋敷と二つあり、その土塁をしのげるところがわずかに残っております。

その大蔵院跡から大内館までどのくらいあるか測りましたら、ちょうど一キロメートル、一直線の道なんです。

この道を隆元がどんな気持ちで大内館に出仕したか。隆元には、人質としての覚悟もある反面、大内の人たちと親密な関係も結べるプラスもあります。また、大内とのやりとりの中で外交経験も積める。

だから、たった一キロですけれども、自分の足でたどってみると、隆元の存在を非常にリアルに実感できるんです。

山口は西の京といわれて、京都のように碁盤の目の町割りができています。そして大蔵大路とか昔の名前が残っております。今でもその道がなんとなく実感できる。これは大変貴重なことです。

これは、歴史の道の本当の小さいものですけれども、道は生きている、ということを非常に実感してまいりました。

「歴史の道 百選」選定委員会の委員としてもご協力いただいておりますが、行政側へ何かご注文はありますか——

歴史の道は、今、保存を喚起しなければ滅びてしまうこともありますので、今、文化庁